

アワーミュージアム



第 65 号 2020 年 1 月 31 日 発行

春の風物詩「ツクシ」について

ゆきなりまさあき
行成正昭 (友の会会長)

原っぱや道端、土手、田畑の畦などにツクシが見られるようになると、春の訪れが感じられ、心が浮き浮きしてきます。まさにツクシは春を告げる使者のようで、その土地の風物詩といえます。3月に入ると、私はもうそろそろツクシが顔を覗かせ始めているのではないかと気に掛かり、そわそわしてきます。

如何物食いの私にとっては、このツクシの独特の風味がたまりません。食することによっても存分に季節感を味わうことができる有難い山菜です。私はここ数年、吉野川の土手で雄大な景色を見ながらツクシ摘みを楽しんでいます。茹でて水分が出ると縮んでしまうので、ビニール製の買い物袋にほぼ一杯になるくらい摘んで持ち帰ります。これを新聞紙の上に広げ、夜なべでツクシの節にあるハカマ(袴)を1本1本根気よく取り除きます。それが終わると、茹でてから水に晒して灰汁を抜きます。その後は、炒め物にして味付けするだけです。まだ頭の固い、若いツクシは少々苦みが残りますが、これこそが他のものに代えがたいツクシの味といえます。

徳島市では商店の野菜コーナーにツクシが並べられているのを見たことはありませんが、愛媛県の松山市では店頭でツクシが置かれていると知人から聞いたことがあります。地域色が見られて興味深いです。今はどうなっているか知りませんが、徳島県西部の三好市山城町では3月下旬から4月上旬にかけてツクシを収穫し、それらの長さを揃えてプラスチック製のトレーに並べ、蓋をして京阪神方面へ出

荷していたそうです。

ツクシは漢字で「土筆」と書きますが、その雰囲気やうまく表現していると思います。ツクシが枯れ始める頃、スギナが一斉に伸びてきます。ツクシとスギナは一見したところ全く違った植物のように見えますが、「ツクシ誰の子スギナの子」と歌われるように、同じ種類の植物なのです。それが証拠にツクシの地中にある地下茎を辿っていくと、スギナに繋がっています。正式の種名(和名)はスギナの方です。その形状が杉の葉に似ているので、スギナは漢字で「杉菜」と書きます。

ところで、スギナ(ツクシ)は、生涯のどの時期にも花を咲かせることがなく、種子を結ばないのに、どうやって繁殖しているのでしょうか。そんなことは知らなくてもこと足りると思います。試験研究に携わった者の“習性とな成る”の例えのように、私は納得できるまで知りたくなる性分です。

実は、スギナは、ワラビとかウラボシに代表されるシダの仲間、その中のトクサ科に属する植物です。そういえば、スギナには多くの節があり、その部分に細い枝が輪生しますが、その枝をすべて外すと、枝を出すことのないトクサに似ています。



ツクシ

多くのシダ類の、十分生長した葉の裏側を見ると、茶褐色の点や星状のものが沢山付いているのがわかります。これは孢子嚢(孢子の入った袋)の集まりで、シダの種類によってその模様が異なります。孢子嚢はやがて弾けてその中の孢子が飛び出し、多くは風に乗ってちりちりに広がっていきます。そう、スギナもシダ植物であるので、花弁や種子は無く、孢子で増えます。これらの植物は「種子植物」に対して「孢子植物」と呼ばれ、孢子で繁殖を続けているグループなのです。一般のシダ類の場合、例えば孢子が育ち良い所に落ちて発芽したとしても、直ぐシダ植物になることはありません。親のシダとは似ても似つかない別の植物体になるのです。孢子の一方が膨れ、その表面を破って発芽して生まれてくる植物体は、成長を遂げても直径1cmにも満たない薄っぺらな葉のような形をしています。それには細い糸状のものが付いていて、土壌から水分や栄養分を吸収します。また、体全体に葉緑素を含んでいて、光合成をすることもできます。この植物体は「前葉体」と名付けられています。日光が余り射し込まず、日頃からじめじめと湿っている、山際のシダの生えた斜面などを注意深く探すと、土壌の表面に付着しているのが見つかります。この前葉体の時期は、シダ植物が精子と卵を造って、種子植物と同じように両性生殖を行うための重要な時代なのです。この前葉体こそがシダの本体であって、この上に精子を造り出す造精子器と卵を造り出す造卵器を生じるのです。そして精子と卵が成熟する頃に雨が降って前葉体が水に



スギナ

つかると、精子はその水を伝わって卵に達し、受精が行われるのです。受精によって生じた受精卵はやがて発芽し、すくすく伸びて孢子を生じる大型の植物が育つのです。普通シダとして目に触れる大型の植物体が無性世代の植物で、孢子から生じる殆ど目に触れることのない小さな前葉体が有性世代のシダです。シダは、このように孢子を造る無性世代と、精子や卵を造る有性世代が交互に現れ、世代交代を繰り返しているのです。

シダ植物であるスギナも、地下茎からツクシという孢子を付けるための茎を出しますが、これが無性世代の植物体というわけです。それ故、ツクシは孢子茎と呼ばれ、高さ20～30cmになります。よく観察してみると、先端に楕円形の孢子嚢穂(ツクシの頭の部分)を付け、それには六角形の孢子葉がびっしりと付いています。この孢子嚢穂が成熟して大きくなると、孢子葉の下面の孢子嚢から孢子を飛ばし始めます。一方、ツクシが枯れる頃伸びてくるスギナは、葉っぱの役目をする茎で、栄養茎と呼ばれ、緑色で高さ20～40cmくらいになり、中空で節から細い枝を輪状に出します。ツクシにもスギナにも、節にハカマがありますが、これは葉が退化したものです。このように、スギナの茎には、ツクシとスギナという2つのタイプの茎があります。一般のシダ類とは異なり、孢子嚢穂はツクシという生殖専門の茎につきます。ツクシの場合、孢子は発芽して雌雄異株の前葉体になり、それぞれに造精子器と造卵器ができ、精子と卵を造る有性世代が現れます。受精卵が発芽すると、我々が普段見るツクシ、スギナになるのです。

ところで、畑のような肥料の効いた土地では、どんどん地下茎を伸ばして栄養茎のスギナばかりがはびこります。そして一端侵入すると、駆除の難しい強壮雑草にもなります。ツクシが一面に生えるのは、荒地、土手、鉄道沿線などのような痩せた土地であることが多いと考えられます。スギナの強かな生存戦略が見て取れ、たいへん興味深く感じます。

友の会行事報告

那賀町日帰りバスツアー (阿波晩茶製造農家・博物館見学)

- 日時 7月20日(土) 8:00～16:00
 ○場所 那賀郡那賀町
 ○担当 おおすぎようこ大杉洋子(友の会役員)
いそもとひろのり磯本宏紀(博物館学芸員)
さかべきみあき坂部公章(博物館係長)
 ○参加者 17名

貸切バスで那賀町をめぐりました。訪れたのは、阿波晩茶製造農家の田淵さん宅、川口ダム自然エネルギーミュージアム(川口エネ・ミュージアム)、相生森林美術館の3か所です。

田淵さん宅では、ちょうど茶葉を釜で煮て、機械ですりつぶすところを見学することができました。さらには、急斜面に造った茶畑で、茶摘み体験も行えました。当日は雨模様だったにもかかわらず貴重な体験をさせていただいたうえ、質問にも丁寧に答えてくださり、田淵さんほか製造農家のみなさんにはとても感謝しています。

続いて訪れた川口エネ・ミュージアムでは、特別に川口ダム内の発電施設等を見学することができ、ダムが防災や電力供給など私たちの生活に大きく関わっていることが実感できました。ミュージアムでは、体験できる展示が多く、楽しく自然エネルギーについて学ぶことができました。

最後に見学したのは、相生森林美術館です。併設している相生ふるさと交流館で晩茶製造用具などの民俗資料を見た後、木のぬくもりあふれる作品が心

を和ませる美術館で過ごしました。

もみじ川温泉で食べた、地元の食材を使ったお弁当のおいしさも含め、ここでしか味わえない那賀町の魅力を再発見することができたバスツアーでした。

(坂部公章)

Voicé 参加者の声

●すみとも住友り子さん

初めて、友の会の行事に参加させていただきました。

晩茶の製造という、伝統を伝える個人宅を訪問し見学する、貴重な経験をさせていただいて感謝しています。晩茶に対して、今まで以上に親しみがもてるようになりました。

今後も、身近なことに興味もてるようなツアーの計画をよろしくお願いします。

●かたべにちか形部仁悠さん

ぼくは、今回の見学に行き、初めて阿波晩茶を作っているところを見ました。阿波晩茶の歴史や、作り続ける大変さを知ることができました。阿波晩茶を、もっとたくさんの人に知ってもらいたいです。

●匿名希望さん

観光用ではない、実際の晩茶製造農家さんの作業を見学させて頂き、貴重な体験となりました。時代により変わる晩茶製造用具についても、展示資料で詳しく知ることができ、勉強になりました。作った茶の流通や、物流の状況なども気になったので、また調べてみたいと思います。



阿波晩茶製造風景



参加者のみなさん

友の会行事報告

夜の文化の森たんけん (昆虫・ブラックライトで光るもの探し)

○日 時 7月27日(土) 19:00～21:00

○場 所 文化の森総合公園

○担 当 ゆきなりまさあき
行成正昭 (友の会会長)
おがわ まこと
小川 誠 (博物館学芸員)
やまだかづたか
山田量宗 (博物館学芸員)
さかべきみあき
坂部公章 (博物館係長)

○参加者 31名

夏の夜、文化の森の公園にて自然観察会を実施しました。

噴水前に集合し、探検の準備を整えたら、上の広場に向かいます。登りきるとそこには、大きなライトトラップ(光に集まる昆虫を採集するしかけ)が設置されていました。辺りは少しずつ闇につつまれようとしています。山田学芸員にうながされて、懐中電灯で地面の暗がりを探してみると、たくさんの宝石のようなきらめきが……。実はこれ、クモの目がライトの光を反射しているとのこと。美しい反面、無数の虫たちに見られているようで、何だかぞっとしました。

いよいよ日が沈んだらライトを点灯し、さあ昆虫観察のスタートです。トラップには数多くの種類の昆虫が集まり、参加した子どもたちもうれしそうです。途中、真っ暗なクヌギの林に分け入りカブトムシやクワガタムシを探したり、小川学芸員からは、



あっ 見つけた!

ブラックライト(紫外線ライト)で光る樹液や地衣類などを教えてもらったりしました。

今回、文化の森という身近な場所での開催ながら、たくさんの発見がありました。林の中ではハチも飛んで来て、自然の中には危険もひそんでいるということを実感しました。多くを学ぶことのできたひとときでした。

(坂部公章)

Voic^e 参加者の声

● やまだけいこ 山田敬子さん

実際に昆虫を見ながら、専門家の人の話を聞いて、とても勉強になりました。子供達も、たくさんの昆虫が見られて楽しかったようです。その上、お土産まで頂いてとても喜んでいました。ありがとうございました。



昆虫にくぎづけ



参加者のみなさん

友の会行事報告

大昔の火おこしを体験しよう！

- 日時 10月26日(土) 13:30～15:00
- 場所 県立博物館 実習室
- 担当 もり としひる 森 敏博 (友の会役員)
おかもと はるよ 岡本治代 (博物館学芸員)
さか べ きみあき 坂部公章 (博物館係長)
- 参加者 14名

博物館にて、火おこし体験を行いました。まず、実習室で岡本学芸員から、火おこしの歴史や留意点について話を聞いた後、バルコニーに出て実際に火おこしにチャレンジしました。今回は「マイギリ式火おこし器」と「火打ち石」を使用しました。見聞きするのとは違い、やってみるとどちらの方法も難しく、特にマイギリ式の方は、木くずから煙が出るまで動かし続ける根気と、木くずの火種を麻ひもに移し炎にする繊細さが求められると感じました。参加者のみなさんは、家族で交代したり休憩を入れたりしながら、和気あいあいとした雰囲気ふんとうで奮闘していました。最後には全員が火をおこせましたが、おそらく日頃なかなか味わえない達成感を得ることができたのではないのでしょうか。

(坂部公章)

Voic^e 参加者の声

● かたべ に ちか 形部仁悠さん

ぼくは、火おこしを体験する前は、火おこしは簡単にできると思っていました。でも、実際にやって



参加者のみなさん

みると、とても体力がいり難しい作業でした。

昔の人は、とても難しい作業を毎日して火を使っていたんだと考えると、今はとても便利だと思いました。

● こばやし めぐみ 小林 恵さん

大変お世話になりました。

初めての参加だったのですが、家族全員で楽しみました。ありがとうございました。



チームワークの見せ所です



やった！炎があがった

友の会行事報告

高知日帰りバスツアー

- 日時 12月7日(土) 7:00～18:15
- 場所 高知県立牧野植物園、高知県立高知城歴史博物館、高知城(いずれも高知県高知市)
- 担当 とくの としほる 徳野壽治 (友の会役員)
いばらぎ やすし 茨木 靖 (博物館学芸員)

まつながともかず
松永友和 (博物館学芸員)
さかべきみあき
坂部公章 (博物館係長)

○参加者 38名

貸切バスで高知県高知市にある博物館を見学しました。

牧野植物園では、まず2グループに分かれて解説つきの見学を行いました。ハーブ園で口にしたステビアの葉の強烈な甘みや、今年8月に新設された展示館シアターで観た4K映像の美しさが強く印象に残りました。その後の自由時間を含めた約3時間だけでは、広大な園内すべてを見て回ることは難しかったです。本物のジャングルの雰囲気なたたえた温室や、牧野博士の生涯と業績がわかる常設展示など、興味深い展示が多数あり、再度訪れてゆっくりと見学したいと思いました。

高知城歴史博物館でも、最初に企画展の解説を聞くことができました。展示されている刀剣の鑑賞のしかたや伝えられているエピソードなど、好奇心を満たす話が聞けました。その後は高知城まで足を運び、土佐の歴史を体感しました。

バス内での茨木・松永両学芸員の話もたっぷり聞くことができ、本当に充実したバスツアーとなりました。

(坂部公章)

Voic^e 参加者の声

● ほんだそういち
● 本田壮一さん

1 高知県立牧野植物園

「植物学の父」牧野富太郎(1862 - 1957)を顕彰するため、1958(昭和33)年4月に五台山に開園(私は7月の生まれで、同年と知った)。私は、牧野日本植物図鑑を購入し、精緻なスケッチに感動した一人である。植物園は高知駅から距離があり、隣の竹林寺(31番札所)を訪ねたことがあるが、園内は始めてであった。友人が高知県佐川町の病院



ハーブを体験

に勤務して訪ねたことがあり、同町の生まれと聞いていた。「土佐の植物生態園」では、標高1,000mを超える山地から海岸に至るまでの植物を観察した。約8haの園地には、博士ゆかりの野生植物など約3,000種類があるという。「牧野富太郎記念館、展示館」には、4K映像のシアターがあった。牧野が描いた図の精密さに迫るほか、ムジナモがミジンコを捕えるシーンが秀逸であった(牧野富太郎が描く植物の巧みなしくみ)。牧野の人物も理解できた。温室には、オオオニバスやランなども栽培されていた。

2 高知城歴史博物館(城博 ジョーハク)

2017年(平成29)3月、高知城のふもとに開館した新しい施設。3階が展示室であった。土佐の歴史の展示に加え、企画展「福を呼ぶ 城博のお正月」が開催されており、鶴や亀、松竹梅を始め、干支の動物などのおめでたい品々や、国宝1点、重要文化財の刀剣4点が公開されていた。かな書の最高峰「高野切」、土佐一国の価値があるとまで賞された太刀「一国兼光」。そして、展望ロビーからの高知城のながめがすばらしかった。

3 高知城

関ヶ原の戦いの功績により徳川家康から土佐一国を拝領した山内一豊は、慶長6年(1601)大高坂山に新城の築城工事を始め、慶長8年(1603)に本丸と二ノ丸が完成、入城した。享保12年(1727)城下町の大火で追手門以外の城郭のほとんどを焼失したが、宝暦3年(1753)までに創建当時の姿のまま再建された。その後は、自然災害や明治維新による全国的な廃城の嵐、太平洋戦争など幾度となく襲った危機を乗り越え、「南海道随一の名城」と呼ばれる優美な姿をした建物を今に残している。

追手門から天守閣の最上階まで登った。階段というより、梯子を登ると、眺めがよかった。夜は、「チームラボ、高知城光の祭」が開催中されていた。

バスの中で、解説いただいた茨木、松永の両学芸員や坂部さんに感謝します。

● あきのえいこ
● 秋野英子さん

孫が小・中学生のときに、友の会行事で色々な経験をさせて頂きました。今では高校生になり忙しくしている孫の勧めで、今回のツアーに参加しました。

学芸員の皆様の資料が、とてもわかりやすく勉強になりました。参加者の皆様とも楽しくお話をしたりして、次回も参加したいと思います。

すみとも
●住友るり子さん

車中で詳しい資料を用いて、事前学習をさせていただいたので、各施設での見所等がわかって良かったです。学芸員の方による解説があるところが、博物館友の会の行事らしくて良いと思いました。お弁当も美味しかったです。会の企画・運営、大変ありがとうございました。

ごとういつき
●後藤一樹さん

牧野植物園では、たくさんの方のことを解説してくれていたの、わかりやすかったです。

高知城では、のぼって上から景色を見ましたが、高くてこわかったです。今年度もお世話になりました。

やま だけいこ
●山田敬子さん

家族4人で参加させていただきました。植物園はとて見ごたえがあり、施設も整っていて楽しむことができました。係員の方の丁寧な説明で、普段は見過ぎてしまう小さな植物のこともよくわかり、子供達も興味をもったようでした。高知城歴史博物館にも行けて、とても充実した1日になりました。また来年も参加したいと思います。



高知城天守にのぼって



参加者のみなさん

鳥居龍蔵記念博物館から
企画展のお知らせ

文化財調査の先覚者
鳥居龍蔵、徳島を探る

鳥居龍蔵のふるさと郷里・徳島における調査活動に焦点をあて、これを網羅的にリストアップするとともに、関連する県内外の文化財を一堂に集め紹介します。また、これらの文化財をとおして、鳥居の調査が県内各地における文化財調査の先駆けとしての役割を担ったことを確認するとともに、徳島での調査活動を鳥居の研究人生に位置づけ、その意義について考えます。

会期 2020/2/8 (土) ~ 3/15 (日)
休館日 月曜日、2/25 (火)
※ 2/24 (月) は開館

会場 徳島県立博物館 企画展示室
観覧料

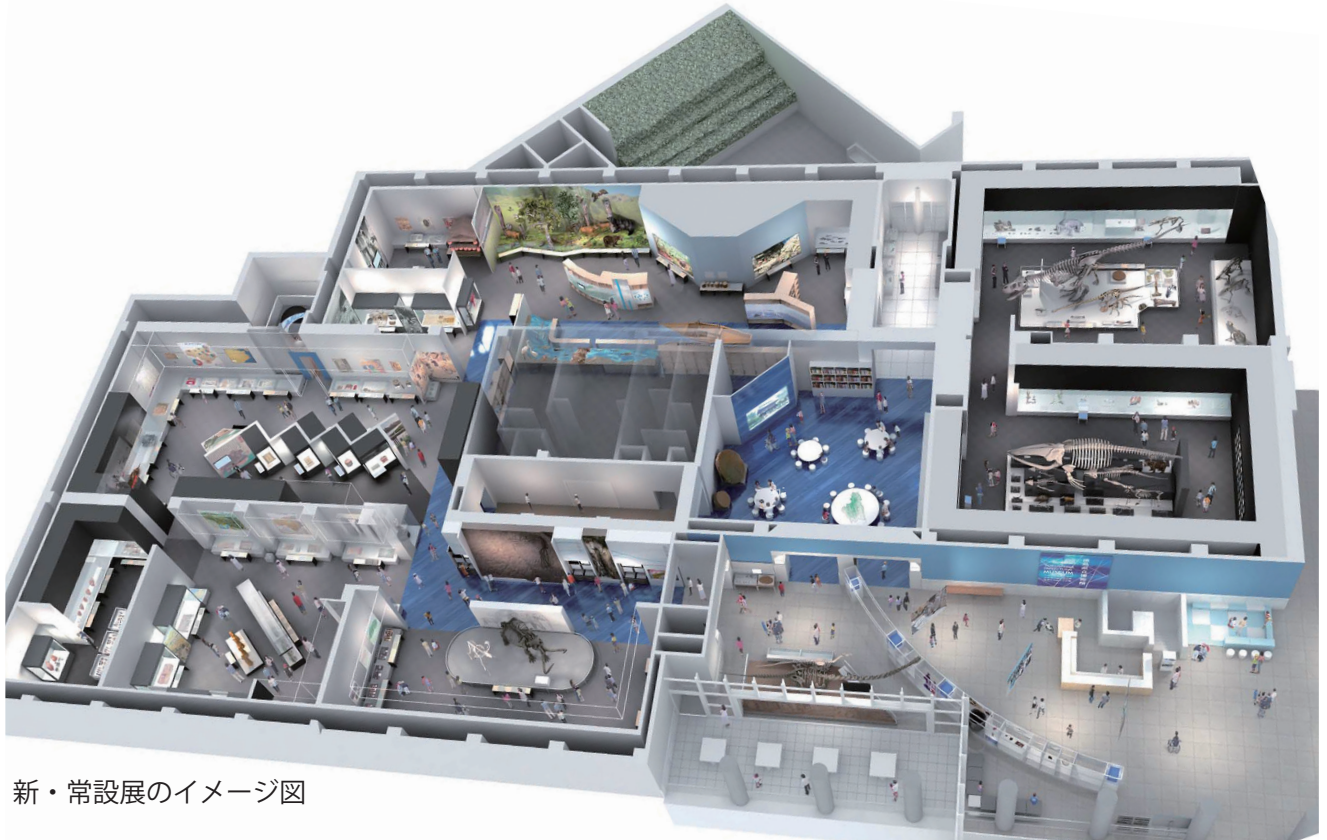
一般 200円 (160円)
高校・大学生 100円 (80円)
小・中学生 50円 (40円)

※ () 内は 20名以上の団体
※土曜日・日曜日・祝日は高校生以下無料
※学校教育による利用は無料
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳所有者及びその介助者1名は無料
※65歳以上は100円(証明できるものを提示ください)



常設展リニューアルのお知らせ

2021（令和3）年8月 グランドオープン！！
～県立博物館 常設展（2階）が新しく生まれ変わります！～



新・常設展のイメージ図

新常設展 4つのポイント

① 徳島まるづかみ！

今話題になっている徳島の恐竜化石発掘の最前線や、徳島の自然と歴史・文化を見て、触れて、感じることができる展示構成です。

② 先端技術で驚きの体験！

インターネットや高精細映像を活用した展示システムにより、参加体験型の展示がさらに充実します。

③ 誰もが楽しめる場所！

多言語化や音声・手話解説はもとより、グラフィックや多機能型解説設備を用いて、誰もが快適に過ごせる施設にします。

④ 地域の交流拠点！

レファレンス（調べもの相談）機能の充実や、県民の調査研究成果の発信を通して、県民とのつながりをより一層大切にします。

アワーミュージアム 第65号

2020年1月31日発行：徳島県立博物館友の会
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197
E-mail: mus-fukyu@mt.tokushima-ec.ed.jp